

〔特別寄稿〕

民俗音楽とポピュラー音楽の間で..

マリ共和国トンブクトウ州の音楽家への調査から

佐藤浩介

(賛助会員(アフリカ学会会員))

1 はじめに..アフリカのポピュラー音楽

1.1 アフリカ音楽って...?

アフリカ音楽といえば、概ね「タイコの音楽」を連想される人が多いようだ。マスメディアが発信する「アフリカらしい」イメージや、一九九〇年代中頃から日本各地で盛んに開催されるようになったジェンベ(1)やサバル(2)の

民俗音楽とポピュラー音楽の間で..マリ共和国トンブクトウ州の音楽家への調査から

ワークショップなどから定着したのであろう。また、アフリカ音楽の研究といえば、「民族音楽 (ethnic music)」、「民俗音楽 (folk music)」、または「伝統音楽 (traditional music)」の研究であると思われる。それらのイメージは概ね、アフリカ諸民族に伝わる「伝統楽器」で、儀礼などの場で演奏される素朴な音楽、といったものである。

アフリカ各地には人口百万人を越える大都會が多数存在し³⁾、ここでは音楽が演奏され、娯楽として消費されている。都市で演奏される音楽は、伝統楽器が用いられることもあるものの、多くはギターやドラムセットなど、欧米でよく見られるバンドスタイルで演奏される。それらの音楽は、テレビやラジオなどで放送され、CDやカセットテープなどで商品として売買されている。また、ナイジェリアのフェラ・クテイ⁴⁾やサニー・アデ⁵⁾、コンゴ民主共和国 (当時はザイール) のフランコ⁶⁾、ジンバブウェのトマス・マプフモ⁷⁾、セネガルのユッサー・ンドゥール⁸⁾、マリのサリフ・ケイタ⁹⁾のような大スターが出現し、活躍の場を世界へと拡げる者もいる。

このような音楽は、紛れもなくポピュラー音楽である。アフリカにはポピュラー音楽が存在し、地元住民から世界中の音楽ファンにまで、広く支持されている。私が本稿で取り上げるのは、アフリカの一地方都市におけるポピュラー音楽の姿である。調査地であるマリ共和国は、前述のサリフ・ケイタをはじめとする世界的知名度を誇る音楽家を多数輩出し続けている。マリ北方の古都トンブクトウ (Tombouctou)¹⁰⁾のポピュラー音楽を通して、アフリカの小都市の姿を描くとともに、ポピュラー音楽とは何かを考察したい。

1・2 調査概要

二〇〇九年、私は二度に渡ってマリ共和国を訪れ、首都バマコとトンブクトウ市において、都合二ヶ月間の臨地調

査を行った。バマコでは、資料収集を行うとともに、トンブクトウ州ニアフンケ県出身の音楽家アフェル・ボクム⁽¹⁾と行動をともし、聞き取りを行った。トンブクトウ市では、住民への聞き取りとアンケート用紙によるデータ収集、ハイラ・アルビイ⁽²⁾をはじめとする音楽家への聞き取りなどを行った。

2 マリ共和国のポピュラー音楽

2・1 マリ共和国・概要

西アフリカの内陸国・マリ共和国は、北方にサハラ砂漠、その南縁にはサヘルと呼ばれる乾燥草原、南部国境には森林が広がる。西部のギニア国境から流れ込む大河ニジェール川は、国土を北東に走り、内陸大氾濫原を形成した後、サハラに接する地点で大きく湾曲して南東へと進路を変え、やがて収斂して隣国ニジェールへと向かう。バマコをはじめ商都セグー、世界遺産の古都モプティとトンブクトウ、かつてのソンライ⁽³⁾王国の都ガオなど、主要都市はニジェール川沿いに発達し、当地の歴史もこの大河を中心に形成されてきた。

現在、この国で最大の人口を占めるのはマンデ⁽⁴⁾(Mande)系民族である。農耕民である彼等は、かつて「黄金の国」として知られたマリ帝国を形成した。人口の約五十%を占めるこの民族グループは、バマコを含む国土の西部を中心に住み、ギニアやコートジヴォワールなどの隣国にも多い。その発祥地によってバンバラ(Bambara)、マリンケ(Malinké)、カソンケ(Khasonké)、ソニンケ(Soninke)などに分かれ、概ね共通した言語を話す。マリでは、

最大人口を有するバンバラ語がよく通じる。

その他マリでは、セネガルからカメルーン北方までの広大なサヘル地域に散住する牧畜民フルベ(Fulbe)、ブルキナファソ国境を臨むバンディアガラ山地に住むドゴン(Dogon)、国境を越えたサハラ交易を担ったベルベル系民族トウアレグ(Tuareg)、東隣国ニジェールにかけて住む農耕民ソンライ(Sonhai)、ニジェール川で漁撈に従事するボゾ(Bozo)などが住む。アフリカ他国の例に漏れず、マリも多様な民族が住む多民族国家である。

2・2 文化政策による国内音楽の保護育成

一九六〇年の独立時、マリ共和国は、旧宗主国フランスの影響力排除を目指すいわゆる「独自路線」を歩もうとした。その際、自国文化の保護育成を図るとともに、フランスをはじめとした外来文化の流入を制限した。音楽に関しても同様に、政府は国内音楽を保護育成するべく、国立楽団と各州に州立楽団を編成させた¹³⁾。これらの楽団は、政府主催の芸術祭¹⁴⁾のコンテストでその技量を競い合った。審査では各地方の特色を強調した演奏が有利とされたため、各楽団はより民族色豊かな演出を目指した。しかし一方で、これらの楽団の多くは、管楽器やエレキギター、ドラムセット、ラテン系打楽器を使用するなど、独立以前より流行していたキューバ音楽やジャズ、リズム&ブルースなどの米国黒人音楽の影響を感じさせる編成で演奏した。結果として、伝統的な音楽と外来のキューバ音楽、米国黒人音楽が混じり合ったような音楽が生み出された。

また、国营放送局ラジオ・マリ¹⁵⁾では、外来音楽の放送を制限し、公立楽団をはじめとした国内音楽を盛んに流した。しかし、それだけでは放送する曲が足りないため、各地の民謡を録音したり、専属音楽家¹⁶⁾に自作曲や伝承曲を

演奏させたものを放送した。

このように、マリでは、外来音楽の影響が少なく、かつマリ各地の民族色が豊かな音楽が育まれることとなった。

2・3 マンデ系グリオの活躍

マリのポピュラー音楽において、大きな役割を担っているのは、マンデ系民族の音楽語り部職能・グリオ⁽¹⁸⁾出身の音楽家である。グリオは、言葉や声を扱う職人で、マンデ系民族の伝統的社會階層⁽¹⁹⁾における職能階層に属する。彼等は、マリ帝国建国の英雄伝説や自らのパトロソ貴族の系譜などを暗唱し、朗々と唄い語る。また、儀礼の進行役、係争の仲裁、相談役なども務める。楽器の演奏を専らとするグリオもいる。グリオ歌手は、伝統楽器であるコラ⁽²⁰⁾やバラフォン⁽²¹⁾、近年好んで使われるギターなどが織りなすゆつたりとしたリズムに乗って、高音域を多用した独特の節回しで唄う。

グリオ出身のポピュラー音楽家には、グリオの伝統に則った演奏を聴かせる者がある一方で、伝統に囚われない自由でモダンな演奏を聴かせる者もいる。

マンデ系民族にとって、音楽は永らくグリオの専売特許であって、上位階層の貴族にとっては禁忌とされてきた。しかし、王族出身のサリフ・ケイタの成功以来、グリオでない音楽家も多数出ている。

2・4 ポピュラー音楽家と歌唱言語

現在のマリでは、前述のサリフ・ケイタをはじめ、自作自演歌手兼ギター奏者のアビブ・コイテ (Habib Koité)、女性自作自演歌手ウム・サンガレ (Oumou Sangaré)、ナハワ・ドゥンビア (Nahawa Doumbia) らの音楽家が活躍している。また、欧州に拠点を置く盲目の夫婦デュオ、アマドゥ&マリヤム (Amadou & Mariam)、女性自作自演歌手ロキア・トラオレ (Rokia Traoré) らの人気も高い。彼等はバンバラ語で唄い、その多くはバンバラまたはその他のマンデ系民族出身⁽²⁾である。

また、北部キダル州出身のトゥアレグ・バンド、ティナリウエン (Tinariwen) はトゥアレグ言語タマシエック語で唄う。彼等はキダルに住居を持つが、海外での人気が高く、地元での演奏機会は限られている。

一方、自作自演歌手兼ギター奏者のアフエル・ボクム (Afel Bocoum)、ヴィユー・ファルカ・トゥーレ (Vieux Farka Touré)、彼の父で故人のアリ・ファルカ・トゥーレ (Ali Farka Touré)、女性自作自演歌手ハイラ・アルビイ (Khaira Arby) など、トンブクトウ州出身の音楽家も、全国的な人気を得ている。彼等はいずれもソンライのルーツを持ち⁽³⁾、ソンライ語のみならず、トンブクトウに住む他民族の複数言語で唄う。彼等の多くは、現在もトンブクトウに活動拠点を置いている⁽²⁾。

3 トンブクトウのポピュラー音楽

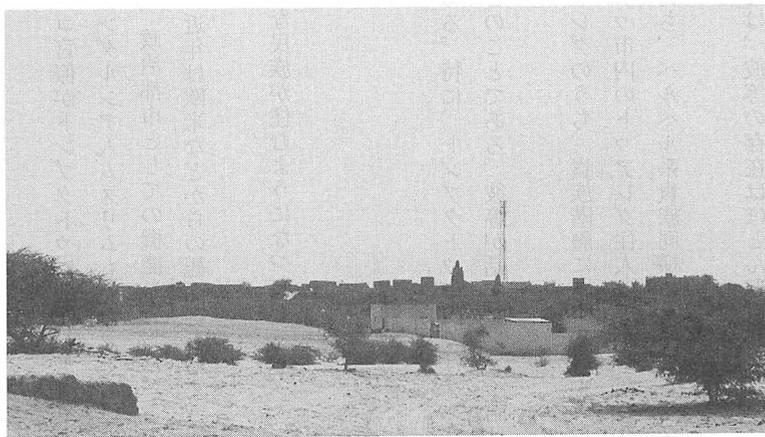
3・1 トンブクトゥ・概要

トンブクトゥ州 (Tombouctou Région) は、マリ北東部に位置する。州人口は約六十万人で、その多くはニジェール川沿いに住む。州には、トンブクトゥ、グンダン (Goundam)、ニアフンケ (Niakouka)、ディレ (Dire)、グルマ・ラルス (Gourma Rharous) の五つの県 (Cercle) が置かれている。

州都トンブクトゥ市は、人口五〜六万人と推定される小さな街である。街全体が世界遺産で、日干し煉瓦に泥を塗って作られたスーダン様式の二つの大モスクが存在感を放つ。一方で、急速に進む砂漠化により、砂に埋もれつつある街でもある。

ニジェール川湾曲部に位置するトンブクトゥは、北方のサハラから岩塩が、南西のギニア山地から金もたらされる交易拠点で、トウアレグ、ソナライ、バンバラなど様々な民族が行き交った。

十四世紀には、マリ帝国のマンサ・ムーサ王がイスラームの本格的な導入を図った際、イスラーム世界に地理的に近いトンブクトゥに大型モスクや学問所を設けた。アラブの高名な学者が多数招聘され、屈指のイスラーム学問都市となったこの地は、世界各地から学



【写真①】 トンブクトゥ市遠景。中央右にサンコレイ・モスクの尖塔が見える。市街地から徒歩5分程度の位置から撮影。

生が集い、国際都市の顔も持ち合わせるようになった。

モロッコの侵略を受けた十六世紀には総督府が置かれ、多くのモロッコ官僚がトンブクトウに赴任した。その中にはアラブ人、ベルベル系民族モール人の他、レコンキスタから逃れたアンダルシア人ムスリムもいた。その後も、フランスの植民地支庁や、独立を果たした共和国の州都が置かれるなど、政治都市としての機能も有した。この頃には、バンバラの商人や官僚がバマコから移り住むようになった。また、近年は欧米などからの観光客も増え、観光業に勤しむ者も増えた。

このように、複雑な歴史に彩られた古都は、長い時間を掛けて、様々な民族が住むようになった。

3・2 トンブクトウの住民

トンブクトウの最大民族はソンライで、州の人口の約三十三%を占める。特に、トンブクトウ市内ではソンライ住人が目立ち、聞き取りによると「今のトンブクトウはソンライの街」とのことである。彼等が話すソンライ語は、仏語と並んでトンブクトウで最も通じる言語である。

次に多く住むのはトゥアレグで、人口の約二十七%を占める。トゥアレグのうち、貴族階層に属するベルベル系白人種の住人は、先祖の習慣に従って未だ郊外の砂漠に住む。トンブクトウ市内のトゥアレグ住人は、かつてベラと呼ばれた黒人奴隷の子孫である。彼等もトゥアレグとしての帰属意識を持ち、ベルベル系貴族同様にタマシエック語を話す。

三番目に多く住むのは、フルベである。しかし、トンブクトウ市内では、彼等の存在はほとんど目立たない。住民

の聞き取りによると、フルベは草原の人であり、都市には住まないという。一方で、トンブクトウの隣県ニアフンケには定住し、農業に従事するフルベが多いという。彼等は、フルベの言葉フルフルデ語を話す。

彼等の話す言語の分類を見ると、ソンライ語はナイル・サハラ語族、タマシエック語はアフロ・アジア語族、フルフルデ語はニジェール・コンゴ語族である。言語分類の第一範疇である語族が異なっていることから、これらは全く異なる言語であるといえる。トンブクトウは、これらの民族が混住する多民族・多言語地域である。

3・3 アリ・ファルカ・トゥーレ

トンブクトウのポピュラー音楽（以後、トンブクトウ・ポップ）を語るべき、最も重要な音楽家は、自作自演歌手兼ギター奏者のアリ・ファルカ・トゥーレ (Ali Farka Touré) [1939～2006] である。トンブクトウ州ニアフンケ出身のトゥーレは、アルマと呼ばれるソンライ貴族階層²⁶⁾に属する。家族に音楽をする者は居なかったが、少年期から音楽を好み、ンジュルケル、ンジャルカ²⁶⁾などソンライ伝統楽器に親しんだ。ソンライをはじめ、フルベ、トゥアレグ、ドゴン、ボゾなどのトンブクトウ周辺民族の音楽を積極的に習得し、やがて儀礼などに呼ばれて演奏するようになった。

一九五六年に出逢ったギター²⁷⁾は、トゥーレにとって最も重要な楽器となった。トゥーレは、自ら習得したトンブクトウの音楽をギターに翻訳し、独特の奏法を獲得した。またこの頃、米国の黒人音楽を聴き、ブルース・ギターの奏法を取り入れ始めた。

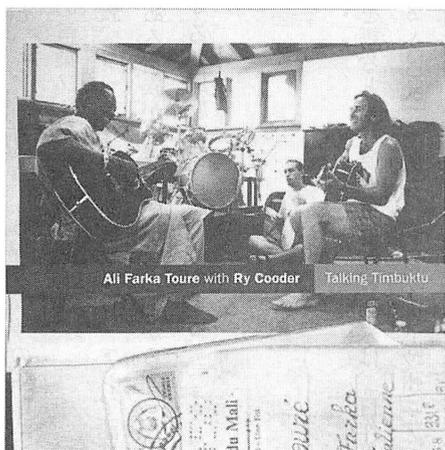
トゥーレは、ニアフンケ県立楽団 (Niakunké District Troupe) などで活動した後、一九七〇年、ラジオ・マリに職

を得た。外来音楽の規制により、放送する曲が不足していたため、トゥーレは得意のギターで自作曲やトンブクトウ周辺民族の伝承曲を盛んに録音し、放送した。こうして、トゥーレの歌とギターは、ラジオを通して毎日のようにマリの人々に届けられた。

一九七〇年代後半、トゥーレが残した録音は、フランスで七枚のアルバム⁽²⁸⁾として発表されたが、当時は全く反響は得られなかった。一九八〇年頃、トゥーレはラジオ・マリを辞し、郷里に戻って農民として過ごしつつ、音楽活動は継続した。

一九八六年頃、イギリスの音楽ジャーナリズム⁽²⁹⁾がトゥーレのアルバムを「発見」し、ブルースそっくりのギターを弾く「謎のアフリカ人ギタリスト」に注目が集まった。半ば引退していたトゥーレであったが、熱心な誘いを受け、一九八七年、英国ツアーとロンドンでのアルバム⁽³⁰⁾制作に応じた。その後、精力的に世界ツアーとアルバム制作をこなし、一九九四年に米国ギター奏者ライ・クーダーと共作した『TALKING TIMBUKTU』でグラミー賞を受けた。

このように、世界的名声を得たトゥーレであったが、彼がトンブクトウで演奏していた音楽、ラジオ・マリに録音した音楽、一九八八年以降に世界向けに制作された音楽との間には、大きな変化はない。トゥーレは、一貫して、自らのギターを中心とした演奏に乗せて、トンブクトウ周辺民族の曲をそれぞれの民



【写真②】
“TALKING TIMBUKTU” [1994]
Ali Farka Touré with Ry Cooder (World Circuit)

族の言語で唄い続けてきた。なおかつ、トゥーレは欧米に活動拠点を移すことなく、ニアフンケに留まり続けた⁽³¹⁾。

3・4 ソンライ歌手の多言語歌唱

このようなトゥーレの姿勢は、後のトンブクトウ出身の音楽家に少なからぬ影響を与えた。例えば、トゥーレ同様にトンブクトウ諸民族の言語で唄い、世界各地で演奏会を開いているアフエル・ボクムは、ニアフンケに留まり続けている。また、全国的な人気を誇る女性歌手ハイラ・アルビイも、トンブクトウに留まり、多言語で唄う。

ボクムとアルビイに多言語で唄う理由を訪ねると、両者とも共通して次のように答えた。

- ① アリ・ファルカ・トゥーレの影響で、多言語で唄うようになった。
- ② トンブクトウの歌手は、昔から当たり前のように多言語で唄ってきた。
- ③ トンブクトウの多くの人々に「メッセージ」を伝えるために、多言語で唄うことは有用である。

これらの証言を、検証してみよう。

①と②の証言は、その意味するところにずれがある。トゥーレの影響で多言語で唄うようになったとする一方で、トンブクトウでの多言語歌唱は当たり前前だ、というのだ。すると、トゥーレも「当たり前前のように」多言語で唄い始めたのではないだろうか。

トゥーレ以前のソンライ歌手を知る手がかりとなる人物に、ハーベル・マイガ⁽³²⁾が居る。ボクムの証言によると、

マイガはニアフンケ出身で、ソンライ貴族階層に属する。トゥーレよりもやや年長で、トゥーレにギターの手ほどきをするほど外来音楽に対する造詣は深かったようだ。「ニアフンケで最初の職業歌手」としてトゥーレとともに活動し、県立楽団では指導的な役割を果たした。そのマイガも、多言語で唄っていた。

この証言から、多言語歌唱はトゥーレの専売特許ではなく、トンブクトウのソンライ歌手にとっては一般的な傾向であつたと思われる。トゥーレもマイガも、自然と多言語歌唱を選んだ。さらに、トゥーレがそのようなスタイルをそのままに世界的名声を獲得したことが、ソンライ歌手の多言語歌唱傾向をいつそう強化した。

言うまでもなく、トンブクトウの音楽家にとつてトゥーレは偉大で、その音楽や業績について疑いはない⁽³³⁾。①の証言は、トゥーレへの敬意の表れと推測される。

③の証言については、ボクムもアルビイも社会問題に関する歌を唄っている⁽³⁴⁾ので、異論の余地は無かるう。しかし、メッセージを伝える手段として、彼等が主体的に多言語歌唱を選んだ、とはいえないだろう。メッセージを伝える以前に、多言語歌唱はソンライ歌手にとつて「当たり前」のことであつただから。

3・5 ソンライ楽師とグリオ

それでは、なぜソンライ歌手は多言語で唄うようになったのだろうか。

ソンライにもグリオに相当する職能が存在する。聞き取りによると、ソンライ・グリオは、専ら儀礼の進行役やパトロンの相談役であり、マンデ系グリオのように音楽を演奏する者ではない⁽³⁵⁾。儀礼の際、グリオは進行役に専念し、別に招かれた楽師が演奏を行う。トゥーレやボクムは、少年期から楽師として儀礼で演奏した経験を持つ。ボク

ムの父親も、当地では高名な楽師であつた。このように、禁忌から自由なソングライナーは、自らの意思で音楽に親しみ、演奏の場を獲得していった。一方、トゥアレグのグリオは、マンデ系同様音楽職能としての性格が強い。彼等の音楽に関する禁忌意識は強く、貴族階層の者が音楽を演奏することは疎まれる。

トンブクトウの住人には、結婚儀礼などに同じ街に住む隣人である他民族を招く傾向がある³⁶。そのような状況の下、禁忌から自由であるソングライナーは、戦略的に他民族の伝承曲を自らのレパートリーに加え、様々な民族の儀礼に参入していったと推測できる。トゥーレやマイガは、そんなソングライナーの系譜を継ぐ者であり、ボクムやアルビイもまた、そこから外れる者ではない。

私が行つたトンブクトウ住民に対する聞き取りでは、上記以外のソングライナー歌手にも明らかな多言語歌唱傾向が見られた³⁷。一方で、ソングライ以外の歌手はほぼ自らの言語でしか唄わない。トゥアレグ音楽家も活躍しているが、彼等はタマシエック語でしか唄わず、支持者の多くもトゥアレグに限られ、他民族からの支持は薄い。

3・6 バマコとの距離感

二〇〇九年十月、トンブクトウ住人に対して、「好きな音楽家」についてのアンケート調査を行つた。回答者一人につき、好きな音楽家を三人まで挙げてもらった。原則としてマリ出身の音楽家に限つたが、マリ以外の音楽家しか聴かない、と言う場合はそれも可とした(そのような回答者は存在しなかつたが…)。

結果、次のような音楽家の名前が挙がつた(有効回答数百一、全三百三票)。

(順位) (音楽家名) (獲得票数)

1. ハイラ・アルビイ★ (45)
2. アリ・ファルカ・トゥーレ★ (27)
3. ビントウ・ガルバ★ (25)
4. キア・モウル★ (17)
4. アビブ・コイテ (17)
4. ウム・サンガレ (17)
7. チャーリー・アルビイ★ (16)
8. ナハワ・ドウンビア (13)
9. ババ・サラ* (11)
10. アフェル・ボクム★ (10)
10. ティナリウエン* (10)
12. アマドウ&マリム (7)
13. サリフ・ケイタ (6)
14. ババニ・コネ (5)
14. ブーバカル・トラオレ (5)
14. テイケン・ジャール・ファコリ (5)

※名前の末尾に★がある者はトンブクトゥ出身。

同じく*がある者は隣州（ガオ、またはキダール）出身。

無印はバマコ（または世界）で活躍する音楽家。

※※十四位ティケン・ジャー・ファコリは、コートジヴォワール出身でバマコ在住。

以上のように、上位4位までがトンブクトウ出身で、いずれもソンライ音楽家であった。特に、ハイラ・アルビイの人気は際だっている。上位十組を見ても、トンブクトウ出身の音楽家が六組を占め、いずれもソンライである。9位のババ・サラは、隣州ガオ出身のソンライで多言語で唄う。アンケートの回答者の約七十%がソンライであったことが影響しているとも考えられるが、トゥアレグ回答者の1、2位も、ハイラ・アルビイとアリ・ファルカ・トゥーレであった⁽³⁸⁾。

ここで注目したいのは、バンバラ語で唄い、バマコまたは世界で活躍する歌手に対する支持の低さである。右の名簿では、一九八〇年代末に世界デビューして以来その名声が衰えないサリフ・ケイタの名もあるが、13位で六票しか集めていない。また、欧米で人気の高いアビブ・コイテ、ウム・サンガレ、アマドゥ&マリアムなども、際だった人気とは言えない。しかし一方で、それらの音楽家の活躍がトンブクトウに届いていないわけでもないことも解る。つまり、トンブクトウの人々は、バンバラ音楽家の活躍を知らながら、それでもトンブクトウの音楽家を支持しているのである。

また、3位ビントウ・ガルバ、4位キア・モウルーの二人のソンライ女性歌手は、バマコでは全く知られていない。驚異的な情報量を持つCD屋台の主人も、正規輸入盤を扱う高級CD店の店員も、彼女等を知らなかった。このような、トンブクトウだけの人気音楽家が少なからず存在する。

これらのことから、トンブクトウには、バマコとは別のポピュラー音楽市場があると言える。しかしながら、トンブクトウ州は人口約六十万、トンブクトウ市は五〜六万人であるので、決して大きい市場ではない。

3・7 トンブクトウ音楽家の生業

トンブクトウには、常時音楽を聴かせるレストランやバーなどはなく、時折ホテルで観光客相手の演奏がある程度だ。従って、音楽家がそのような場で演奏し、収入を得ることは常ではない。音楽家の主な収入源は、儀礼などでの演奏によるものと、富裕者が週末に時折開く個人的なパーティーでの演奏だという。このような儀礼やパーティーは、広場などの公開の場で行われたり、個人宅であつても誰もがほぼ自由に入入りできる状況で開催されるため、演奏は誰もが楽しむことができる。

音楽家の中には、CDやカセットテープを制作して販売する者もいるが、前述のように市場規模が小さいため、その売り上げが音楽家の生活を支え得るとは思えない。また、マリの人々



【写真③】アフェル・ボクム&アルキバル (Afel Bocoum & Alkibar)。左端のギター奏者がボクム。中央右のゲスト歌手ヤクバ・ムムニ (Yacouba Moumouni) は、ニジュールのバンド「ママル・カーシー (Mamar Kassey)」のリーダーで、民族はソンライ。右端は、ンジュールを奏でるヨロ・シセ (Yoro Cissé)。2009年3月、バマコにおける結婚披露パーティーにて。

にとつて、CDは決して安価なものではない³⁹。

以上から、トンブクトウの音楽家は、演奏だけの収入では生計は立たないと思われる。聞き取りによると、トンブクトウ音楽家には、農業、ホテル経営、公務員、洗濯業など、音楽の他に生業を持つ者が多い⁴⁰。つまり、彼等はいわゆるフルタイム・ミュージシャンではなく、普段は一般の職業者として生活し、パーティーや儀礼の際に音楽家となつて人々を楽しませているのだ。

また、トンブクトウ市内で、人々がラジオやカセットプレイヤーを大音量で鳴らすなどして、音楽を楽しんでいる様子は観察できなかった。レストランなどでも、テレビが点いていることはあつても、BGM的に音楽が流されていることは稀であつた。そのことから、トンブクトウの人々にとつて、音楽を楽しむ最大の機会は儀礼やパーティーでの生演奏であると考えられる。

4 ポピュラー音楽とは？

4・1 ポピュラー音楽の定義

ピーター・マニユエル⁴¹ [1997] は、音楽をクラシック音楽 (芸術音楽 : art music)、民俗音楽 (folk music)、ポピュラー音楽 (大衆音楽 : popular music) の三つに分けることができる、とした。そして、ポピュラー音楽が持つ特徴として、次のような要素を示した。

- ① 生産者と消費者が分かれている音楽
- ② マスメディアと結びついた音楽
- ③ 都市に起源を持つ音楽
- ④ 伝統的な生活習慣である特定の儀式やライフサイクルの行事と関係のない音楽
- ⑤ 日常生活において、娯楽として消費される音楽
- ⑥ 同じ曲が時代を越えて繰り返し演奏されずに、レパートリーの回転が速い音楽
- ⑦ マスメディアによって個人崇拜を煽られた「スター」が演じる音楽

マニユエルは、上記のような要素のうち、いくつかを合わせ持つものをポピュラー音楽であると呼ぶことができる、と考えた。マニユエルは、このような分類は音楽そのものを理解する上で有用であると指摘する一方で、「きつちり境界線を引いて分類したり、音楽ジャンルを完璧に定義することは不可能」である、とも述べている。

4・2 トンブクトウの「ポピュラー音楽」?

トンブクトウで親しまれている音楽を、これらの要素に当てはめて検証してみよう。

①に関しては、演奏者と聴取者が分かれている点で、当てはまると言える。当然、CDなどの制作・生産・販売は、専門の業者が行っている⁽⁴⁾。②に関しては、トンブクトウではマスメディアは大きな役割を果たしているとは言いにくい。当地の人々が音楽を楽しむ一般的な手段は、生演奏の聴取である。従って、⑦についても当てはまるとは

言えない。ハイラ・アルビイ、アリ・ファルカ・トゥーレ、ビントゥ・ガルバらのスターは存在するものの、トンブクトウにおける彼等の人気は必ずしもマスメディアの扇情によるものではない。③は、トンブクトウ・ポップの成り立ちが州立楽団^④やトゥーレに始まるとすると、当てはまると言える。④は、トンブクトウ・ポップと儀礼やパーティーとが密接に関係しているため、当てはまると言いきれない。⑤についても同様に、聴取の主な機会が生演奏であるため、音楽は決して日常的なものではない。⑥は、トンブクトウの音楽家の多くが自作曲を唄うことから、レパートリーの入れ替わりはあるだろう。しかし、ヒット曲が次々生まれる状況にはなく、欧米のポピュラー音楽のように、日替わりのヒットチャートがあるとは思えない。トンブクトウの伝承歌が複数の音楽家によって演奏され、定番曲として親しまれている。

4・3 「オレのグリオだ」

住民に対するアンケート調査を行っている際、住民の興味深い発言を聞いた。あるトゥアレグ男性が聞き慣れない音楽家の名を挙げたのだ。私は言うまでもなく、トンブクトウ在住のアシスタントも知らない様子。そこで、アシスタント氏が、「これは誰だ？」と質問すると、「彼は、オレのグリオだ。」と答えたのだ。このアンケート調査で名前が挙げた音楽家六十六組のうち、支持者が一人だったトゥアレグ・グリオは八人を数え、うちタマシエック語でしか唄わない音楽家は三人だった。これらのトゥアレグ・グリオがどのような活動をしているのかは不明であるが、この中に「オレのグリオ」が何人か混じっているはずだ。

このトゥアレグ男性の回答は、自分のグリオと、アルビイ、トゥーレやサリフ・ケイタなどの大スターとを、全く

区別していないことを表している。若しくは、自分のグリオと名だたるスターとは同等である、との矜持の顯れとも言える。

現実には、トンブクトウでは、ポピュラー音楽と儀礼などで演奏される音楽とは、区別できない。儀礼に呼ばれて演奏するのは、エレキギターのような歪んだ電化音を発するテハラダント⁽⁴⁾で反復フレーズを刻むトゥアレグ・グリオであることもあれば、一声で聴衆を熱狂に陥れるハイラ・アルビイであることもある。また、儀礼が貴重な演奏の機会であることは、トゥアレグ・グリオにとつてもアルビイのようなスターにとつても、同じである。

4・4 越境する音楽

以上のように、トンブクトウで親しまれている音楽は、「ポピュラー音楽」と呼ぶにはしつくり来ない部分が多い。しかし一方で、そのような音楽をそのままに、トンブクトウを熱狂させるとともに、マリそして日本を含む欧米の人々に歓迎されている。アリ・ファルカ・トゥーレやアフェル・ボクム、ヴィユー・ファルカ・トゥーレは欧米へツアーに出かけ、ハイラ・アルビイやチャーリー・アルビイ⁽⁴⁵⁾はマリで全国的な人気を得て、世界進出を窺っている。トンブクトウの音楽は、儀礼やパーティーなど非日常的な状況で親しまれているうちに、ダンスに耐えうるリズムの強化など、地域や民族を越えた「ポピュラー音楽的なもの」を獲得していったのだ。その過程は、マスメディアや近代的な生産システムとは無関係であった。トンブクトウにおける人々と音楽との関わりは、本質的な部分では変わっていないだろう。しかし、その音楽が一步トンブクトウを出ると、ポピュラー音楽となるのだ。

ポピュラー音楽という形態の音楽など、存在しない。ポピュラー音楽とは現象であつて、音楽そのものではない。

トンブクトウの住人は、ポピュラー音楽と民族音楽、民俗音楽、伝統音楽などとは区別していないはずだ。そもそも、トンブクトウの音楽は「多民族音楽」である。「伝統」は、新しい楽器で新曲が演奏されることで、日々塗り替えられている。

5 おわりに

ポピュラー音楽を通してトンブクトウを見るうちに、思い浮かんだ別の地域がある。奄美だ。沖縄ではなく、奄美である。

最初に思い当たったのは、沖縄であった。その歴史的過程の中で、トンブクトウがバマコとは別のポピュラー音楽を作り出したのと同様に、沖縄にも独自のポピュラー音楽を持っている。しかし、沖縄には常時音楽を聴かせる酒場があり、多くのフルタイム・ミュージシャンが存在する。急速に観光地化し、「日本化」した沖縄からは、「毛あしび⁴⁶⁾」に代表されるような昔ながらの音楽に対する親しみを失いつつあるようだ。県内人口約百万人⁴⁷⁾、県外にも移住者が多く、多くの愛好者も存在するため、沖縄音楽の市場は大きい。

一方奄美は、奄美群島の人口約十二万人⁴⁸⁾と市場規模は小さい。名手と呼ばれる音楽家（唄者^{うたしや}）は多いが、フルタイム・ミュージシャンはいない⁴⁹⁾。常時音楽を聴かせる酒場やライブハウスなどはなく、専らお祭りや観光イベントの他、個人的な酒宴などで演奏される。しかし一方で、CDを全国販売し、日本各地で演奏会を開く唄者も多くなる。このような状況は、トンブクトウと酷似している。

私は、大学院で「臨地調査（フィールド・ワーク）」という思考方法を学んだ。「現場に行つて、実際に見て聞いて、それから考えよう」という方法である。そして私も、僅かな期間ではあるが、実践に及んだ。現場に出発する前には、当然ながら色々な準備をした。できる限りの資料や情報を集め、いくつかの仮説を立てながら調査の標的を定めて計画を立てる…。ところが、いざ現場に行つてみると、見事なほど事前の準備が役に立たない。バマコそしてトンブクトウで、様々なものを見聞きするうちに、私は事前に描いていた仮説をほぼ全て棄てた。そして、修士論文に臨んだのであるが、その大部分は経過報告に終わった。本稿も、そこから半歩ほども進んでいない。もつと見えてくるためには、また現場に行かねばならない。そして、また多くの仮説を棄てることだろう。

本稿を読まれている皆さんは、哲学を志している方が大部分だと思ふ。多くの方は、本を読み込んで、議論し、真理に迫ろうと試みておられることだろう。

でも、現場も面白いですよ。「臨地哲学」、というのも如何でしょうか？

感想が頂けたら幸いです。 satoh7star@gmail.com

〔参考文献〕

- 入江晋也 二〇〇六「階層制の現代の変容―マリ共和国サヘルサハラ地帯、トゥアレグ職人 エネハダンに注目して」（博士予備論文）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- 佐藤浩介 二〇一〇「マリ共和国・トンブクトウ州におけるポピュラー音楽とその文化的特性―多言語状況下で唄うソングラ

- イ音楽家の活動から」(博士予備論文) 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 ([url=http://komokin.hinaa.net/maj/maj_034.html](http://komokin.hinaa.net/maj/maj_034.html))
- 菅野 淑 二〇〇八 「在日セネガル人と日本人愛好者による」アフリカ舞踏音楽「活動の事例報告」研究代表者・和崎春日編 研究成果報告『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学研究』
- 鈴木裕之 二〇〇八 a 「キニアにおけるグリオの変化と継続性：近代化に直面するあるグリオ一族の事例」代表・川田順造 研究課題『アフリカの地域社会における無形文化財のありかた』
- 鈴木裕之 二〇〇八 b 「日本に生きるアフリカ人ミュージシャン：その経歴と活動」研究代表者・和崎春日編 研究成果報告『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学研究』
- 日野舜也 二〇〇一 「アフリカ都市研究と日本人研究者」嶋田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市的世界』pp.1〜28 世界思想社
- マイナー、ホーレス M. 一九八八 『未開都市トンプクツ』 赤阪賢訳 弘文堂
- マニユエル、ピーター 一九九二 『非西欧世界のポピュラー音楽』中村とらやう訳 (株) ミューシックス・マガジン
- リー、エレン 一九九二 『アフリカン・ロッカーズ』鈴木ひろゆき訳 JICC 出版
- Direction Régional de la Planification de la Statistique de l'Informatique de l'Amenagement du Territoire et de la Population 2008 "ANNUAIRE STATISTIQUE ANNÉE 2006 RÉGION DE TOMBOUCTOU" Direction Nationale de la Statistique du Mali (Bamako)
- Ethnologue Language of the World [http://www.ethnologue.com/\(2009/06/07\)](http://www.ethnologue.com/(2009/06/07))
- Ministere de l'Artisanat et du Tourisme 2008 "CARTE TOURISTIQUE DU MALI" Office Malien du Tourisme et de l'Hôtellerie (Bamako)
- Ministere de l'Economie de l'Industrie et du Commerce 2007 "ANNUAIRE STATISTIQUE DU MALI 2006" Direction Nationale de la Statistique du Mali (Bamako)

(一) djembé マンデ系民族のドラム型片面タイロ。シンベともいう。

- (2) sabar セネガルの長胴片面タイコ。
- (3) 例えば、キンシャサ (DR コンゴ) 約四百七十万人、ラゴス (ナイジェリア) 約四百万人、アジスアベバ (エチオピア) 約二百三十万人、アビジヤン (コートジヴォワール) 約百九十万人、ナイロビ (ケニア) 約百八十万、ダカール (セネガル) 約百六十万人など。日野 [二〇〇一] による。
- (4) Fela Anikulapo Kuti [1938-97] 自作自演歌手兼サックス奏者。米国黒人音楽を吸収消化した独自の音楽「アフロ・ユート (Afro beat)」の創始者。ナイジェリアの国民的英雄。
- (5) Sunny Ade [1946-] 自作自演歌手、ギター奏者。キング・サニー・アデとも。多数の打楽器とギター、スライドギターを用いた「ジュジュ (juju) ・ニュージック」の第一人者。一九八〇年代、世界的な人気を獲得。
- (6) Luambo Makiadi Franco' [1938-86] 自作自演歌手、ギター奏者。キューバ音楽の影響を受けた「リンガラ (lingala) 音楽」の第一人者。煌びやかな分散和音 (アルペジオ) によるギターと、美しい男性コーラスが特徴。なお、この音楽の呼称は、スークース (soukousou)、ルンバロック、コンゴリズム音楽など、不定。
- (7) Thomas Mapfumo [1945-] 自作自演歌手。シヨナ族伝統のムビラという親指ピアノの音楽から、チムレンガ (Chimurenga) 音楽を創出。彼と彼の音楽は、当時の白人支配に対する抵抗の象徴であった。
- (8) Youssou N'dour [1959-] 自作自演歌手。セネガル固有のリズムを取り入れた「ンバラ (mbalax)」を演奏。二〇〇四年、グラミー賞を受ける。
- (9) Salif Keita [1949-] 自作自演歌手。マリ王家の出身ながら、禁忌とされていた歌手となる。マンデ系民族の伝統的な歌唱法を会得し、強靱な歌声を聴かせる。
- (10) 「トンブクトウ」の呼称は、他にトゥンブクトウー、ティンバクトウ (Timbuktu) 、トンブクツなどがある。本稿では、マリ共和国の公文書での仏語表記である "Tombouctou" や、在日マリ大使館での用語に従った。
- (11) Ael Booum [1955-] トンブクトウ州ニアフンケ出身の、自作自演歌手兼ギター奏者。ソンライとフルベのルーツを持つ。アリ・ファルカ・トゥーレ (後出) のバンドで長年活躍し、トンブクトウ・ポップの草創期を知る。世界盤 CD を三種発表し、世界的名声を得ている。
- (12) Khaïta Arby [?] (年齢非公表) トンブクトウ県出身の女性歌手、バンドリーダー。ソンライ、アラブ、ベルベルの複雑なルーツを持つ。マリでの全国的な知名度と、トンブクトウでの圧倒的な人気を誇る。

- (13) 「ソンライ」の呼称は、他にソンガイ、ソングイなどがある。本稿では、当地の人々の呼称により近く、マリ政府公文書の表記も「Sonhai」であることから、「ソンライ」を採用する。
- (14) このような音楽保護育成政策は、同じく独自路線を採用した隣国ギニアに倣ったものである。
- (15) 一九六〇年以降、毎年開催された若者週間 (Semaine des Jeunes) や、一九七〇年により大規模に衣替えした隔年芸術文化祭 (Biennales) など。各州でも、同様の芸術祭が開催された。
- (16) マリ国营ラジオ (Radio Nationale du Mali) の通称。現マリ・ラジオ・テレビ局 (Office de Radiodiffusion Télévision du Mali, ORTM)。
- (17) たとえば、アリ・ファルカ・トゥーレ (Ali Farka Touré [1939 ~ 2006]) や、ブーバカル・トラオレ (Boubacar Traoré [1942 ~]) など。トゥーレは後出。
- (18) Griot マンデ系言語ではジェリ (Jeli) などと呼ばれる。グリオの呼称は、西アフリカ諸民族の音楽語り部職能に対しても用いる。マリにおけるマンデ系グリオ出身のポピュラー音楽家には、歌手のカッセ・マディ・ジャバテ (Kasse Mady Diabate) / アブドレイヌ・ジャバテ (Abdoulaye Diabate) / アミ・コイト (Ami Kote) / コラ⁽⁸⁾ 奏者トゥマリ・ジャバテ (Toumani Diabate) / バラフォン⁽⁹⁾ 奏者ケレティギ・ジャバテ (Kéléthigi Diabate) / ギョニ⁽¹⁰⁾ (Goni : ギョニ状のリユート) 奏者バセウ・クヤテ (Bassekou Kouyate) などがある。
- (19) 鈴木「二〇〇八a」によると、マンデ系民族には貴族 (ホロン) / 職人 (ニヤマカラ) / 奴隸 (ジョン) の階層があり、グリオは職人階層に属する。民主化に伴い、奴隸階層は廃止されている。
- (20) Kora 大型ヒョウタンを利用した、ハープリユート。二十一絃のことが多い。
- (21) balafon 木琴状の打楽器。
- (22) ウム・サンガレはフルベ出身だが、バマコで成長し、バンバラ語を話す。
- (23) トゥーレ父子はソンライ。ボクムはソンライの父とフルベの母を持つ。アルビイは、ソンライ、アラブ、ベルベルなどの複雑なルーツを持つ。
- (24) ボクムは、欧州にも拠点を設けつつあるようだ。
- (25) トンブクトゥに住むソンライ社会において、モロッコ征服時にやってきたモロッコ人やアラブ人と混血同化した者はアルマという貴族階層を形成した。その他、アラブなどとの混血ではない自由民 (ボルチーン)、職能民・奴隸民 (ガビ

ビ、またはビビ)の階層がある。

- (26) シュルケル (Junkel) は、ヒョウタンの胴にヒツジなどの皮を張ったリュート状の小型撥絃楽器。通常二絃だが、元々は一絃だった。シヤルカ (Jarka) は、同じくヒョウタンにヒツジやヘビの皮を張った擦絃楽器。バイオリンのように弓で弾く。馬の尾毛を使った絃を一本張り、弓にも馬の尾毛を使用する。
- (27) トゥーレは、アフリカ各地を巡業中であつたアフリカ・バレエ団 (Les Ballets Africain) : 後のギニア国立バレエ団) の公演で、初めてのプロ音楽家によるギター演奏を見た。
- (28) バリのソナフリク・レロード (Sonatic) とソノディスク (Sonodisc) から。これらの音源のは、"RADIO MALI" [1996]、"RED & GREEN" [2004] に聴くことが出来る。
- (29) アンディ・カーシヨウ (Andy Kershaw) : チャーリー・ギレット (Charlie Gillett) が、BBCで取り上げた。
- (30) "ALI FARKA TOURÉ" [1988] 制作はワールド・サーキット (World Circuit)。これ以降のトゥーレのアルバムは、いずれもワールド・サーキットによる。
- (31) トゥーレは、一九九九年を最後に、大規模な世界ツアーも行わなくなった。ニアフンケで農地改革・灌漑事業などに取り組み、二〇〇四年、ニアフンケ市長に当選。二〇〇六年、骨癌で死去。叙勲の上、国葬された。二〇〇五年発表の "IN THE HEART OF THE MOON" は、アフリカ人音楽家として初の二度目のグラミー賞を獲得した。
- (32) Harber Maïga [1938?~1983] 歌手で、いくつかの楽器や作曲も手がけた。文科省に職を得ていた。ボクムは、マイガから音楽のすべてを教わつたと述べている。
- (33) トゥーレの晩年、トゥーレとボクム他ニアフンケの音楽家との間には、深刻な対立が生じた。しかし、そのような対立を承知した上で、彼等は「トゥーレは偉大だ」と言う。
- (34) ボクムは、環境問題、多民族間の結束、家族や友人の大切さなどを唄い、ラブ・ソングなどはあまり唄わない。アルビイは、自身も経験した強制的な結婚に異を唱えるなど、女性の権利向上に関心が強い。
- (35) 私が確認できたソンライ音楽家のうち、グリオ出身であつたのはボクムのバンド「アルキバル」のシヤルカ奏者だけであつた。
- (36) 二〇〇九年三月、バマコで観察したトンブクトウ出身トゥアレグの結婚披露宴では、ソンライの人気音楽家が多数招かれ、演奏していた。司会は、フルベのグリオであつた。一方、二〇〇九年九月、トンブクトウで観察したソンライの結

婚儀礼では、司会がソナライ・グリオで、楽師にはトゥアレグの人気テハラダント奏者が招かれていた。

(37) 例えばビントゥ・ガルバ (Bintou Garba) はソナライ語と仏語、キア・モウル (Kia Maoulou) はソナライ語とアラビア語、チャリー・アルビ (Thiale Arby) はソナライ語、タマシエック語、アラビア語、など。

(38) トゥアレグ回答者 (n=28) による獲得票数上位の音楽家は、1位ハイラ・アルビ (十五票)、2位アリ・ファルカ・トゥール (九票)、2位ティナリウエン (九票)、4位アビン・コイチ (五票)、5位ビントゥ・ガルバ (四票) であった。ティナリウエンは、隣州キタル出身。

(39) CDは、一枚2,500〜3,000FCFAで日本円では五百〜六百元。海賊盤は、あまり見かけない。ハマコでは、1,000FCFA出せばレストランで夕食が取れる。

(40) 他に職を持つことが確認できなかった音楽家は、活動拠点をハマコに移している者である。彼等は、ハマコでフルタイム・ミュージシャンとして活動していると思われる。

(41) Peter Manuel [1952〜] 民族音楽学者。北インド古典音楽研究で博士号取得。

(42) 聞き取りによると、トンプクトゥにはCDなどの音源録音に耐えうるスタジオ設備はないという。トンプクトゥの音楽家は、ハマコで音源を録音し、CDなどを制作する。

(43) トンプクトゥの州立楽団は、ミステル・シヤス・ドゥ・トンプクトゥ (Le Mystère Jazz de Tombouctou)。

(44) teherant トゥアレグのバンジョー状の三絃撥絃リュート。

(45) Thale Arby [?〜] ソナライ若手自作自演歌手。ハマコに移り住み、全国的な人気を得つつある。ハイラ・アルビとの血縁は無い。

(46) 仕事の後の夜、若い男女が集まって、三線と歌を楽しむ遊び。

(47) 沖縄県資料統計 WEB サイト。 <http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/> (2010/12/10)

(48) 奄美群島の奄美市および大島郡十一町村の合計人口。

鹿児島県統計情報 <http://www.pref.kagoshima.jp/tokai/bunyajinko/index.html> (2010/12/10)

(49) 男性歌手 N.K. は文具店経営、女性歌手 N.K. は料理店経営、N.M. は空港勤務、Y.M. は幼稚園教諭、など。いずれもCDを全国販売し、日本各地で演奏会を開く人気歌手である。奄美の音楽についての情報は、私自身の調査ならびに奄美音楽のプロデューサー森田純一氏の助言による。

民俗音楽とポピュラー音楽の間で：マリ共和国トンプクトゥ州の音楽家への調査から